

生徒の個性を尊重する
自由な学風の中学・高校時代だった

世界的な演出家・俳優、笈田ヨシ氏(83)は少年時代を神戸で過ごした。当時神戸では歌舞伎、文楽、剣劇などの興行が盛んに行われており、それらは笈田少年にとっても最高の娯楽だった。神戸の街とともに笈田氏の原点を築いたのが母校の甲南高等学校・中学校だ。自由闊達な校風のなか、教師の文学論に耳を傾けたり、演劇部で先輩と触れ合ったりした日々。今の笈田氏にどう生きているのだろうか。

この時期、日本では社会人や学生が新生活を始める季節です。そんな人たちに贈る言葉は、将来の夢に思いを馳せるよりも、まず目の前の一瞬一瞬の出来事に集中していただきたいということ。迷いのない人生なんてありません。迷いながらも、質のいい瞬間を重ねてほしい。選ばなかった道について、振り返る必要はないのです。僕だって外国で仕事をしているなんて、昔は夢にも思っていませんでした。運命がそうさせたのです。

僕がパリに渡ったのは1968年で、当時35歳でした。以来、50年間外国で仕事をしてきました。半世紀外国にいて学んだのは、付け加えるのではなく捨てることの大切さです。人間は生きていくなかで多くのことを付け加えます。それは権威だったり名誉だったり、自分を一介の人間以上の存在にしてしまうもの。その埃をどう取り除いていくか。捨てていく勇気と、ひとりの人間として生きていく覚悟があれば、どこへ行っても仕事ができます。

35歳まで日本社会にいた僕には、捨てるものがたくさんありました。それがよかった。日本で培ったことに固執するのではなく、捨てていくことで独自のものが生まれる。でないと、いつまでもニッポンの演出家・俳優、笈田ヨシにとどまります。他方、別に日本人であること自体を捨てる必要はない。僕は何を演出しても日本的だと言われますし、それはそれで構わないのです。しかし、自分は日本人だという意識に立って仕事をするのではない。そんな枠組みは自分を狭くします。もっとな日本人ではなく、もっとな人間になる。それが僕の思考です。

職業人としてのベースを築いてくれたのが、甲南高等学校・中学校での学園生活です。先生や演劇部の先輩から教わった「演劇とは、技術ではなく人間の問題。演劇を通じて、どこまでそこに到達できるか」。この考えは変わることなく現在も僕の土台になっています。これがなければ、今こんな風にこの仕事をしているか、見当もつきません。

甲南で過ごした日々のことは今も鮮明

に覚えています。本当に自由な校風で、先生は生徒を決して型にはめようとしなかった。こんなことがありました。中学1年のとき先生に呼び出されて「保護者会できみのお母さんから『うちの子が勉強もせずに、家で舞台の模型ばかりつくって困っています』と相談された」と。子供心に遊んでばかりでよくないと思っていたので恐縮していたら、「いいことだ。続けなさい」とおっしゃった。とても嬉しかったのを覚えています。

毎年楽しみにしていた学芸会では、自分たちで戯曲を選んで芝居をしていました。学芸会あと、ちょっとしたスター気分になっていたら、先生が(本名の)飯田ではなく「おい、そこの役者」と呼ぶ。生徒が好きなのに打ち込んでいる状況を、先生も面白がっておられました。

授業も独特でした。先生方には「源氏物語」や「新古今和歌集」といったそれぞれの専門があり、教科書から離れた文学論が度々展開されていました。ただし、だからきみも文学好きになれとは決して言わない先生たちでした。押し付けることなく、先生一人ひとりの学問観なり人生観なりを僕たちに示してくださったのです。

甲南は当時珍しかった中高一貫校で、先輩が旧制高校時代の入学者だったこともあり、演劇部の年長は7年上でした。大人と一緒にいるようなもので、中学生だけの演劇部にはない厚みがありました。中学2年のときお年玉で坪内逍遙の『ザ・シェークスピア全戯曲』を買って読んだし、モリエールやチェーホフ、トルストイについて先輩と議論していた。どこまで理解していたかは疑問ですが、少なくとも本は読んでおかないと恥をかいたのです。おかげで知的な成長は速まりました。

創立者の平生先生が掲げておられた理念のなかで、「個性の尊重」という言葉はよく覚えています。実際に普段先生から「こうしなさい」と言われたことはありませんでした。教わったのは逆に「道徳は古着である」ということ。誰かが打ち立てたモラルは、その瞬間にもう古びている。誰かが書いた道徳を教えこむのではなく、人間が本来持っている個性をどう伸ばすか。それが平生先生の考えだったのだと思います。

個性を生かすという点は、僕の仕事も同じです。むかしは演出家とは自分の思うように俳優を動かし、曲を選び、装置をつくらせる仕事だとらえていましたが、今は違います。どうやって俳優や装置家たちが才能を目一杯発揮できるか。皆の才能を最大限に引き出したうえで、その集まりによって化学反応を起こさせる。それが僕の役割です。芝居のような共同作業は義務感だけではハートのあるものではできません。一人ひとりが自ら考えるようになると、義務感ではなく自主性が出てきます。そのエネルギーをお客さんのほうへ流れるように仕向けるのです。

演出の秘訣は忍耐です。自分の意図は見せずに、一人ひとりの個性や自主性が育つまで待つこと。甲南における先生と生徒との関係とまったく同じです。

Profile
笈田ヨシ
Yoshi Oida

おいだ・よし。本名飯田好男。フランス在居の演出家・俳優。1933年神戸市生まれ。甲南高等学校・中学校から慶應義塾大学に進学し1957年卒業。文学座、劇団四季を経て1968年渡仏。1970年ピーター・ブルックが設立したC・I・R・T(国際演劇研究センター)に参加。中近東、アフリカ、アメリカを訪れた。1974年より演出家・俳優として海外生活を始める。1992年にフランス芸術文化勲章シュバリエ受勲。2007年同オフィシエ、2013年同コマンドゥールを受勲。著書『俳優漂流』(五柳書院、1989年初版発行)は17ヶ国語に翻訳されている。最近では2016年マーティン・スコセッシ監督の映画『沈黙』に出演。2017年2月には東京芸術劇場で上演されたオペラ『蝶々夫人』の演出を手がけた。

学校法人
甲南学園

阪神間モダニズムの薫りを
今に伝える

1919年、教育者・実業家であり文部大臣を務めた平生凱三郎(ひらお・はちさぶろう)らにより旧制甲南中学校が開校。平生の教育理念である「人格の修養と健康の増進を重んじ、個性を尊重し、各人の天賦の特性を伸長させる」を建学の精神とする。甲南大学は旧制七年制高等学校を母体に1951年開学。現在、文学部・理工学部・経済学部・法学部・経営学部・知能情報学部・マネジメント創造学部・フロンティアサイエンス学部の8学部、人文科学研究科・自然科学研究科・社会科学研究科・フロンティアサイエンス研究科の4研究科、法科大学院を擁する総合大学に発展している。